

MUSEUM

ミュージアム・アイズ

EYES

Mm
MEIJI UNIVERSITY
MUSEUM

Vol. 74
2020

特集

社会に 飛び出す 博物館資料



Contents

- 展示&リサーチ…東京2020応援プログラム 共催企画展示「神田発信!大学スポーツの軌跡」
- 市民レクチャー…国分寺創建についての断想
- 学芸研究室から…中部高地黒曜石原産地の古環境と先史人類の行動を探る
— 科研費による新たな共同研究がはじまりました —
- 博物館活動報告…公開特別講義 伝統的工芸品の経営とマーケティング Vol.14他
- 収蔵室から…古代中国の帯鉤
- 南山大学協定通信 / 図書室から / 博物館入館者数の動き / 団体見学の記録 / M2カタログ / 博物館友の会から



特集

社会に飛び出す博物館資料

「博物館資料との出会い」と言うと、訪ねて行ってそこで展示を見るというイメージを誰もが思い浮かべるとは思います。実はみなさんの身の回りには多くの博物館・美術館の所蔵資料・作品が掲載され、またテレビ番組でも放映されています。博物館が所蔵する資料は常設展や館蔵品展で公開されているものが全てではなく、バックヤードの収蔵室には多くの資料が保管されています。それらは、直接人の眼には触れずとも、出版・放映という形でも世の中に広く知られているものが多くあります。また、所蔵館ではなく他の博物館・美術館に貸し出されて展示されることもあります。明治大学博物館では2019年度中に238点の写真掲載利用、630点の館外貸出がありました(2020年1月現在)。今回は資料所蔵機関である博物館の社会的役割として、メディアに対する画像の提供と館外出展について注目してみましょう。

刑事部門

写真掲載利用

2014~2018年度 のべ1723点の内

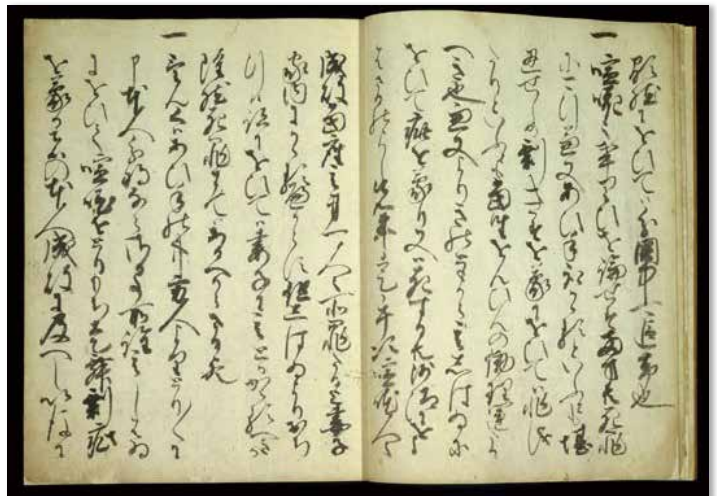
BEST

10

刑事部門の写真掲載では意外にも普段展示室で見慣れていない資料が多く利用されていることがわかります。歴史事象を表現した絵画資料や日本史の教科書・副教材でおなじみの資料がランクインしています。

第1位 今川仮名目録 39件

NHK大河ドラマ「おんな城主 直虎」の影響もありましたが、戦国大名による本格的な分国法ということから歴史書に掲載されるケースが多くあります。今川氏親が制定した「仮名目録」(大永6年・1526)と子義元による「仮名目録追加」(天文22年・1553)からなり、家臣団統率のため私闘を厳禁した喧嘩両成敗法の条項が知られます。館蔵のものは制定後間もない1570~90年頃の高写本と推定されています。



今川仮名目録



地方測量之図

第2位 地方測量之図 34件

梵天竹を立て、間竿を地面にあてている姿、大方儀・小方儀など測量器具を覗く姿、野帳に測量結果を記録する姿など、測量の様子が生き生きと描かれています。検地は江戸時代の幕府・領主の支配政策として日本史の教科書に取り上げられますが、検地帳こそ大量に残存しているものの、ビジュアルティのある素材に恵まれません。そのため本図がよく利用される傾向にあります。葛飾北斎・画 嘉永元年(1848)

第3位 『徳川幕府刑事図譜』「白洲の図」 29件

旧幕府時代における犯罪の発生、犯罪容疑者の検挙、取調べ、収監、裁判、処刑の様子を描いた全部で63点の図版を収録した画報。明治26年(1893)に刊行されています。「白洲の図」以外の場面も合わせると最も掲載利用の多い資料となります。もともと江戸時代の司法や刑罰については図像資料に乏しく、メディアが欲しい“絵”が得られる便利な資料です。



白洲の図



鑑札

第4位 株仲間鑑札 20件

株仲間は江戸時代における商工業者による排他的な同業組合のこと。近世経済の特質を表わす要素の一つとして日本史の教科書でもおなじみ。享保・天保改革との関わりで株仲間の公認・解散は受験勉強でも印象深い用語。

第5位 有馬家中延岡城下屋敷付絵図 20件

譜代大名内藤家の故地、日向国延岡(宮崎県)の有馬家時代(1614~1671)の城下絵図。延岡市の文化行政のさまざまな局面で活用されていることが利用件数に表れています。



延岡城下屋敷付絵図(部分)

- 第6位 水戸藩小石川御屋敷御庭之図 13件
- 第7位 公事方御定書 12件
- 第8位 錦絵 生麦発殺之図(早川松山・画) 11件
- 第9位 錦絵 薩州屋敷焼撃之図(豊洲国輝・画) 8件
- 第10位 錦絵 往古うはなり打の図(歌川広重・画) 8件



口上之覚

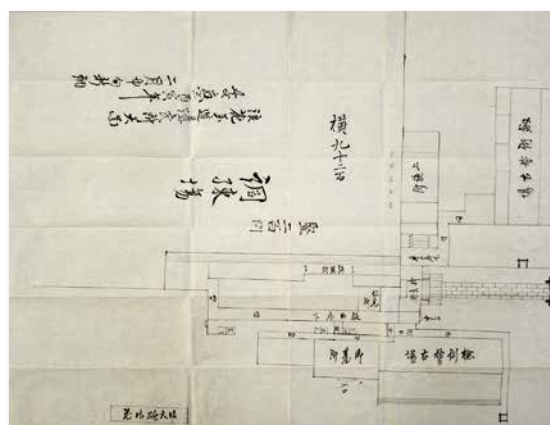
番外編 貞享4年(1687) 口上之覚(生類憐み令)

5代将軍綱吉による生類憐み令は体系的に条文化された法令ではなく、触れ・達しや判例の総体がそう呼ばれているものです。そのため研究は後世編纂された法令集などに拠っており、リアルタイムに作成された史料の伝来が少ないため、内藤家文書に残る書面は希少な存在です。歴史番組で生類憐み令を取り上げる時には必ずと言ってよいほど利用される画像です。

刑事部門 館外出展 譜代大名内藤家文書

刑事部門の館外出展要請は特定の資料に集中する傾向はありませんが、内藤家の文書群からは、近年では慶応2年(1866)「浪花玉造講武所大図」、延宝9年(1681)老中奉書「端午為祝儀若君へ銀子十枚献上に付披露」、延享4年(1747)「祭礼並祈禱代参諸遷宮神事能取喚」など、さまざまな資料が貸し出されています。

内藤家文書には徳川幕府から内藤家に対し発給された文書や内藤家が公儀勤番を勤めるに際して作成した記録類を多く含んでおり、特にリアルタイムで作成された文書・記録を数多く含む点に特徴があります。そのため、内藤家の歴史に限定されることなく江戸時代に関わるさまざまな展示に活用される可能性を持っています。



浪花玉造講武所大図

考古部門

考古部門では、遺跡から出土した土器・石器・金属器などの考古資料の外部展覧会への貸し出しはもちろん、教科書や副読本、模試の問題にも写真がよく使われています。特に、弥生時代の土器や石庖丁は、中学校や高校で1度は目にする機会があるかもしれません。最近人気の縄文時代の土偶は、ロンドンやパリに出展されるなど、世界にも紹介されています。

写真掲載利用

2014～2018年度 のべ1606点の内



教科書や副読本に登場する、各時代を代表する資料が並びました。旧石器時代の日本列島に人々が存在していたことを初めて証明した岩宿遺跡の石器をはじめ、弥生土器とイネの稲穂を摘み取る石庖丁は、まさしく弥生時代を象徴するものといえます。この数十年に考古学では新たな知見や研究成果が次々と生み出されていますが、今もって明治大学が発掘した資料が普遍的な重要性をもっていることを示しています。

第1位

群馬県岩宿遺跡の石器(旧石器時代) 88件



岩宿遺跡 石斧

旧石器時代が教科書に登場するのは中学校からですが、岩宿遺跡は日本史をひもとくうえで必ずといっていいほど登場する遺跡です。それまで縄文時代より前には日本列島に人類がいなかったと考えられていましたが、1949年の発掘調査による石器の出土は、まさに教科書を書き換える発見であり、相沢忠洋氏や明治大学の杉原荘介氏のエピソードとともに、考古学による発掘調査と研究の大切さを伝えてくれる資料です。

国の重要文化財に指定されており、毎年夏～秋は地元の岩宿博物館で展示されています。

第2位

福岡県板付遺跡の土器(弥生時代) 65件

北部九州に稲作が伝わり、さらに東へと広がるときに使われた土器が弥生土器です。表面に縄目がなく、壺が多いのが特徴ですが、その中でも代表的なものが北部九州に多く見られる「遠賀川式土器」であり、この板付遺跡から出土した板付I式土器の壺はその特徴をよく示す例として教科書や副読本に多数紹介されています。



板付遺跡 壺形土器(板付I式)

第3位

京都府深草遺跡の石庖丁(弥生時代) 46件



深草遺跡 石庖丁

弥生時代は水田で稲作を始めた時代であり、その様子を如実に物語るのが、コメの収穫具でもある石庖丁です。穴の部分に紐を通して結び、指を掛けて下部の刃の部分で稲穂を摘み取る道具であり、稲作とともに大陸からもたらされた新たな道具です。深草遺跡の資料は、全体の形状や穴の数などが典型的であり石庖丁の好例としてよく取り上げられています。

● 第4位 青森県亀ヶ岡遺跡の遮光器土偶(縄文時代) 43件

● 第5位 岩手県雨滝遺跡の石器(縄文時代) 37件

縄文時代の様々な打製石器のセットです。

雨滝遺跡の石器(石匙・石錐・石鏃)





番外編



上：仁徳天皇陵古墳遠景
(ガウランド撮影、後藤和雄複写、原品は大英博物館蔵)

左：東大寺 盧舎那仏(坂本万七コレクション)

明治大学が発掘した遺跡から出土した資料の写真以外にも貴重な写真資料を収蔵しています。美術品や民芸品の写真家として知られる坂本万七(1900-1974)の作品10万点をはじめ、英国人の古墳研究者ウィリアム・ガウランド(1842-1922)が明治期に撮影した古墳の写真(複写、寄託資料)などがあり、研究や出版に活用されています。

館外出展



土偶はつねに人気の資料ですが、これまでナンバーワンだった亀ヶ岡遺跡の遮光器土偶に代わり、ここ数年土偶の専門書によく取り上げられるようになった江原台遺跡の山形土偶がトップに立ちました。考古学専攻の設立当初から調査研究を続けている旧石器時代の石器群についても毎年のように貸し出しの依頼があります。



第1位

千葉県江原台遺跡 山形土偶(縄文時代) 3件

頭の形からその名がある山形土偶の代表例として知られています。大きく膨らんだおなかには妊娠した姿を表現しており、また指先をキュッと外側に上げている愛嬌のあるしぐさが特徴的です。近年注目が集まり、ロンドンやパリなど海外をはじめ国内各地の展覧会に出展されています。



第2位

青森県亀ヶ岡遺跡 遮光器土偶(縄文時代) 2件

土偶の代表格ともいえる遮光器土偶のなかでも、当館の土偶は足の一部以外ほぼ完全な形を残している優品として著名です。戦前には、国の重要美術品にも認定されていました。頭頂部はまるで冠のように立体的に造形されており、赤い彩色が一部に残ることから髪飾りを表現しているものとみられます。



第2位

東京都茂呂遺跡 出土石器(旧石器時代) 2件

板橋区で発掘された国内2例目の旧石器時代の石器群で、東京都の文化財に指定されています。この遺跡の発見により、北関東以外にも旧石器時代の遺跡が広がることが確認されました。黒曜石で作られた鋭い刃をもつ石器は、刃以外の部分を潰して加工する「茂呂型ナイフ形石器」と呼ばれ、関東地方から九州地方の北部まで分布することがわかっています。

このほか、同数2位として北海道の白滝服部台遺跡出土石器と置戸安住遺跡出土石器がランクインしています。いずれも旧石器時代のもので、代表的な黒曜石製石器です。



*他館の常設展示に継続的に貸し出しているものはランキングから除いています。

東京2020応援プログラム 共催企画展示

「神田発信! 大学スポーツの軌跡」

村松 玄太(明治大学史資料センター)



展示室エントランス

専修大学大学史資料室、明治大学史資料センター、中央大学大学史資料課、日本大学企画広報部との共催、法政大学史センター協力による企画展示「神田発信! 大学スポーツの軌跡」(以下「本展示」と呼称。会期 2020年1月24日～4月12日 会場 ①明治大学博物館特別展示室②明治大学中央図書館ギャラリー)について紹介する。

近年明治大学史資料センターでは、他大学類縁機関(大学アーカイブズ)との共催展示に注力している。それを列挙すると以下の通りである。

- ①2010年 日本の大学—その設立と社会(全国大学史資料協議会東日本部会との共催)
- ②2014年 近代日本の幕開けと私立法律学校—神田学生街と法典論争—(専修大学大学史資料課・中央大学大学史編纂課・日本大学大学史編纂課との共催 ※機関名称は当時)
- ③2015年 学生たちの戦前・戦中・戦後(全国大学史資料協議会東日本部会との共催)
- ④2017年 神田学生街の記憶 1880-1980 五大法律学校の軌跡(専修大学大学史資料課・中央大学大学史資料課・日本大学広報部広報課・法律学校研究会との共催 ※機関名称は当時)
- ⑤2018-2019年「ボアソナードとその教え子たち」(法政大学・関西大学との共催)
- ⑥2019年 『新しい大学』の誕生—今日の大学の原点をさぐる(全国大学史資料協議会東日本部会・立教学

院展示館との共催)

共催展示の意義とは、個々の大学で所蔵する資料をあるテーマの元に集約・比較することを通して、個別大学で所蔵するだけでは詳らかとならない資料間の「共通性」と「個性」の一半を明らかにし得ることである。大学の個性化が叫ばれる昨今、前者の解明はもとより、各大学独自の個性を資料から抽出し得る点に共催展示の積極的な意義を見出せるといえよう。

この10年で7回目の共催展示となる今回、「神田」と「大学スポーツ」を展示のキー概念とした。前者の「神田」とは明治大学の所在する東京都千代田区北東部(旧東京市神田区)地域である。今回共催の専修・中央・日本大学、そして協力の法政大学はいずれも神田区内で法律学校として出発し、現在も千代田区内にキャンパスないし施設を有している大学である。まずそのことを共通項とした。これは従前の②④展示でも使用した概念である。今回もう一つのキーとして「大学スポーツ」を定めたのは言うまでもなく、今夏開催の東京オリンピックが念頭にあったからである。今年は奇しくも神田の大学からはじめてのオリンピックを輩出して100年目にもあたる(1920年のアントワープオリンピックに加賀一郎(明治大学)が出場)。そのため、今回「東京2020応援プログラム」の認証を受けた。

しかし本展示の主眼はオリンピックではなく、あくまで神田の大学における学生スポーツの過去・現在・未来を紹介することである。共催・協力の各大学はいずれも第二次大戦以前から各種スポーツの盛んな大学であり、日本スポーツ全体の発展に貢献してきた。神田の大学が多数のオリンピックやメダリストを輩出してきたのは、その延長線上にあるといつて良い。

スポーツの祭典である東京オリンピック開催が一つの契機ではあったが、神田の大学が、どのようにスポーツと出会い、それを課外活動(部活)として組織化し、精華を競い、現在に至ったのかを明らかにしようとしたのが本展示の眼目である。

その観点に立ち、以下のような展示構成とした。

- I 近代スポーツのはじまりと学生
- II 大学スポーツの組織化と飛躍

Ⅲ 精華を競う—体育会の活躍

(神田・大学スポーツの現在)

Ⅳ テーマ展示「神田の大学と箱根駅伝」

※テーマ展示は中央図書館ギャラリーにて開催

「Ⅰ」では明治初年に欧米からスポーツが導入された状況と、明治中期頃から神田の私立高等教育機関においてスポーツが行われるようになってきた状況について簡単に紹介した。都市部の神田には、広いグラウンドを有することは難しく、当初神田の大学でスポーツは盛んではなかった。

それが大正中期から昭和戦前期にかけて、旧制大学認可に相前後して運動部が組織化されて一挙に盛んになり、長じてオリンピックをはじめとする国際大会に出場する選手をも輩出するようになった。

「Ⅱ」ではその歩みをめぐって、各大学所蔵写真や資料から明らかにしようと努めた。このコーナーでは「オリンピックと大学生」「武道・格闘技」「陸上競技」「球技」「競泳」「ボート競技」「馬術・登山・ウィンタースポーツ」「応援団」に区分して、各大学スポーツの多様な発展を明示しようとした。ここで注目すべき資料としては、専修大学所蔵の東都大学野球連盟前身の五大学野球部写真と、明治大学所蔵のボクシング関係資料がある。前者は東都大学野球の前身時代の貴重写真である。後者は日本の学生ボクシング黎明期資料である。後者には珍しいオリンピック選手証も含まれる。



「Ⅱ 大学スポーツの組織化と飛躍」

「Ⅲ」は第二次世界大戦後を中心に、学生スポーツがどのような実績を残し現在に至ったかを紹介した。その一つの目玉が、水泳で世界記録を連発し「フジヤマのトビウオ」と讃えられた古橋廣之進関係資料(日本大学所蔵)である。さらに、野球・ラグビーなど、国民的な人気を獲得していった学生スポーツの諸相を紹介した。ここではまた、各大学の学生スポーツ新聞等の協力を受け「神田・大学スポーツの現在」と題して、現在の各大学体育会各部の写真パネルをパネル展示した。そしてオリンピックイヤーということもあり、各大学から輩出した金メダリストの一覧パネルと、視き型ケース内に、各大学で所蔵するオリ・パラ関係の貴重資料を展示した。



「Ⅲ 神田・大学スポーツの現在」と視き型ケース内のオリンピック関係資料

今回は第2会場を設定した。会場は中央図書館ギャラリーである。本会場はトピック展示コーナーとし、学生スポーツ屈指の人気を誇る「箱根駅伝」を特集した。1920(大正9)年に、東京箱根間往復大学駅伝競走、いわゆる箱根駅伝は開始し、2020年で第96回となる。神田の大学と箱根駅伝の関わりは古い。明治大学は、早稲田・慶應・東京高等師範(現筑波大学)とともに第1回大会から参加をしている。中央大学、法政大学は第2回から、日本大学は第3回から、専修大学は第15回からと草創期より箱根駅伝に出場してきた。箱根駅伝100年を迎えた記念すべき今年、テーマ展示を企画したものである。

この展示では、最多出場・最多優勝を誇る中央大学から多くの資料出展を受けた。



「Ⅳ テーマ展示 神田の大学と箱根駅伝」

まだ開催中の展示であるため、総括をするのは早計であるが、展示を準備しながら考えたことを最後に一言しておく。神田の大学が連携して展示を行うことに、意義深い点も多いが、他方で反省すべき面も多い。その一つがまだ大学アーカイブズにおいては、スポーツ関係資料の収集が十分進んでいないという点である。そのため、写真や紙資料の比重が高く、スポーツ展示に期待される躍動感が弱い面が憾みとなった。

これを機会として各運動部とも連携し、情報と資料の収集に努め、今後より充実したスポーツ展示を目指したいと考えている。

国分寺創建についての断想

山路 直充 (市立市川考古博物館
明治大学博物館研究調査員)

国分寺創建とはなにか

国分寺とはなにかと問われれば、741(天平13)年2月に聖武天皇が護国のために諸国に建立を命じた、僧寺と尼寺の二寺からなる寺、と答えるのが一般である。では、その護国とはなにかと問われれば、735～737年におきた飢饉と天然痘の流行からの鎮護という答えになるだろう。とくに天然痘は、当時の人口の半数を死に至らしめたという説(W. W. Fariss 1985『Population, Disease, and Land in Early Japan, 645-900』Harvard University Press)もある。現在問題となっている新型コロナウイルスの比ではなかった。しかし、国分寺の建立の命令が出た時、飢饉や天然痘の流行は峠を越えていた。なぜ時期が外れたのか。後に出された2回の造営督促の命令も含め、その時々^{けが}の政治状況との関わりが大きい。文献史料からその流れを追うと、以下のようになる。

740年10月、聖武天皇は天然痘の穢れに満ちた平城京を棄て、伊賀→伊勢→美濃→近江国を巡幸して、平城京の北、山背国^{やましろ}の恭仁京^{くに きょう}へ遷都する。翌741年1月の朝賀は遷都を宣言する場となり、その翌月に出された国分寺建立の命令は、遷都にともなう記念事業の意味合いが強い。建立の命令で示された造営の財源は、寺を造るのに到底足りるものではなく、命令は事業の布告程度であった。

743年10月、聖武天皇は大仏造立の命令を出し、紫香楽^{しがらき}の地で造成が始まる。翌744年11月に大仏の造立が始まるが、7月になって国分寺造営の基礎財源が示される。国分寺造営は大仏造立に関わって前進したようだ。一方、聖武天皇は744年2月に難波京、翌745年1月に紫香楽宮へと遷都を繰り返し、5月に平城京へ還都する。還都にともない、大仏造立は8月に現在の東大寺の場所で再開されることになった。747年9月に大仏の鑄造が開始されると、11月に国分寺造営の督促の命令が初めて出される。宮都・天皇一諸

国・国司の関係が、宮都・東大寺大仏一諸国・国分寺釈迦仏に投影されて、造営が督促されたのである。

2回目の督促は756(天平勝宝8)年6月で、5月に聖武太上天皇が亡くなり、娘の孝謙天皇が一周忌の法要を国分寺でおこなうため命令を出した。相次ぐ督促による急造のせい^{けい}か、767(神護景雲元)年11月には修造の命令が出ている。

8世紀の年代の定点となる国分寺創建

七重塔の建立など大規模な造営にも関わらず、諸国における創建の年代は大半が8世紀中葉のうちに収まる。つまり、この造営に関わって出土した考古資料は、一律に8世紀中葉の暦年代が与えられ、文献史料や出土史料に恵まれない地域にとって、貴重な暦年代の定点となる。しかし、8世紀中葉と括った年代には、創建の原因となった飢饉や天然痘の流行から修造の命令までが含まれる。諸国における具体的な造営の年代は、創建から2度の督促への対応も含め、一律とは思えない。考古資料を交え、8世紀中葉とされる年代をさらに細かく捉えてみたい。

瓦の文様と製作技法からみた年代

今回は、諸国国分寺の瓦を精力的に調査された梶原義実さんの業績に拠りながら(梶原義実2010『国分寺瓦の研究』名古屋大学出版会)、越中・三河・石見国分寺を取り上げたい。地域が異なる3国に共通するのは、軒丸瓦・軒平瓦の文様と軒丸瓦の製作技法である。

梶原さんによると、越中国分寺の軒丸瓦の瓦当^{がとう}文様と製作技法が、三河国分寺と石見国分寺に影響を与えたという(図1)。技法は成形台の上で軒丸瓦を製作するもので、横置き型一本づくりといわれる(図2)。この技法は国分寺創建に先行して730年代に平

城京で始まり、いくつかの国分寺でも創建期に採用された。三河国分寺と石見国分寺は、越中国にいた工人もしくはその影響を受けた工人が瓦を生産したと考えられている。

人の移動にともなう文様や技法の伝播ということになるが、この時代は工人が勝手に国を越えて移動することは制限されていた。734年に作成された「出雲国計会帳」(出雲国が733年8月1日から734年7月末日までに授受した公文書の目録)には、出雲国が作成した「匠丁帳」という帳簿が記載されている。内容は不明だが、国内に所在するさまざまな職種の工人が登録されていたと思われ、国が工人を管理していたことがわかる。また、この計会帳から工人が宮都と往来する状況も判明し、工人は国家や国が把握した上で、広範囲に移動したことがわかる。「出雲国計会帳」を参考にすると、越中国を中心とした三河国や石見国への工人の移動も、3国とともに国家が承認した移動といえる。このような移動を可能にした状況を国分寺の造営という視点で捉えてみると、造営は差し迫った状況下にあったと理解できる。747年ないしは756年の督促の命令を受けての状況である。

756年12月に西国を中心とした26か国へ仏具が下げ渡された。翌年に開催される聖武太上天皇の一周忌法要に用いるためである。法要は金堂でおこなわれたと考えられるので、26か国の国分寺は、すでに僧寺・尼寺とも金堂が完成していたか、僧寺のみが完成していたか、一周忌法要までに完成の目途がたっていたか、のいずれかであった。26か国のうちの安芸国分僧寺は、出土した木簡から750(天平勝宝2)年には金堂が竣工していたことが論証されている(藤岡孝司・妹尾周三2011「安芸国分寺」『国分寺の創建—思想・制度編—』吉川弘文館)。

金堂と七重塔の造営について、741年の創建の命令は塔の造営が重視され、756年の督促は法要をおこなう金堂の造営が重視されていた。下総国分僧寺は塔から造営が着手され、このような変化を裏付けている。747年の督促は、3年以内に塔、金堂、僧坊を造営するように命じている。建物の記載順からすれば塔の造営が重視されたとみるべきだが、この督促は大仏造立と関連することから、釈迦仏を安置する金堂の造営も重視されていた。塔が金堂よりも先に記載されたのは741年の命令の影響で、金堂も同等に重視されていたとみるべきであろう。安芸国分僧寺の金堂は、747年の督促を契機に着工されたとみてよい。

安芸国を参考にすれば、26か国は747年もしくは

756年の督促の命令を経て国分寺の造営に本格的に着手した可能性が生じる。石見国も26か国に入るので、石見国分寺の軒丸瓦に影響を与えた越中国分寺の造営は、造営に必要な期間を考慮すれば、756年の督促によるとは考えられない。軒丸瓦の横置き型一本づくりという技法は、諸国の事例からみて越中国で考案された技法ではない。国分寺造営で宮都や他国の工人もしくは宮都や他国で技術を習得した工人を動員して軒丸瓦を生産したことになるので、督促を受けた状況下での生産が考えられる。越中国はこの26か国に含まれないが、石見国の事例からすると、国分寺は747年の督促の命令で着工されたのではないだろうか。

8世紀中葉の国分寺創建を、瓦という考古資料で示される状況と文献史料で示される状況を結びつけることで、より細かな暦年代が考えられ、国分寺創建の新たな一面が理解できる。横置き型一本づくりに関していえば、梶原さんは今回以外の事例も紹介しているが、近江国衙一下野国分寺一下総国分寺でも似たようなことが考えられる。今後の課題としたい。



図1 越中・三河・石見国分寺軒丸瓦・軒平瓦(梶原2010)

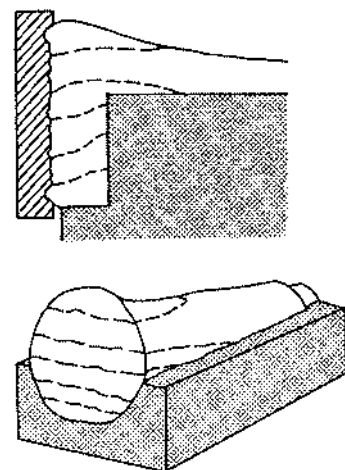


図2 越中国などの横置き型一本作り模式図(梶原2010)

中部高地黒曜石原産地の古環境と 先史人類の行動を探る

— 科研費による新たな共同研究がはじまりました —

島田 和高 (明治大学博物館考古部門学芸員)

明治大学黒曜石研究センターでは、2011～2015年度にかけて文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「ヒト-資源環境系の歴史の変遷に基づく先史時代人類誌の構築」を実施しました。この共同研究では、まず中部高地和田峠原産地に近い標高1400mの広原湿原の堆積物から、過去3万年間の植生変遷と森林限界の移り変わりを復元しました。また、広原遺跡群の発掘調査からは、蛍光X線分析(XRF)による遺物の原産地分析や黒曜石原石の堆積学的調査を援用し、後期旧石器時代における黒曜石獲得の領域や行動系を解明しました。学際的な研究体制のもと、古環境との相互関係として黒曜石原産地における人類活動を具体的に論じることができました(小野昭編『人類と資源環境のダイナミクスI 旧石器時代』雄山閣 2019)。

こうした成果を受けて、2019年度から次の三つの大きな目的からなる共同研究がはじまりました。以下にその概要と経過を紹介します。目的(1)3.0万年以前の海洋酸素同位体ステージ3(MIS3)にあたる中部高地の植生と森林限界の高度を知りたい。黒曜石原産地はどのような景観だったのか。目的(2)広原遺跡群で明らかにされた黒曜石獲得の領域や原産地行動系について、より多数の事例を用いて時系列的な変化を復元したい。黒曜石獲得にまつわる旧石器人の活動の実態と変化を知りたい。目的(3)黒曜石は、

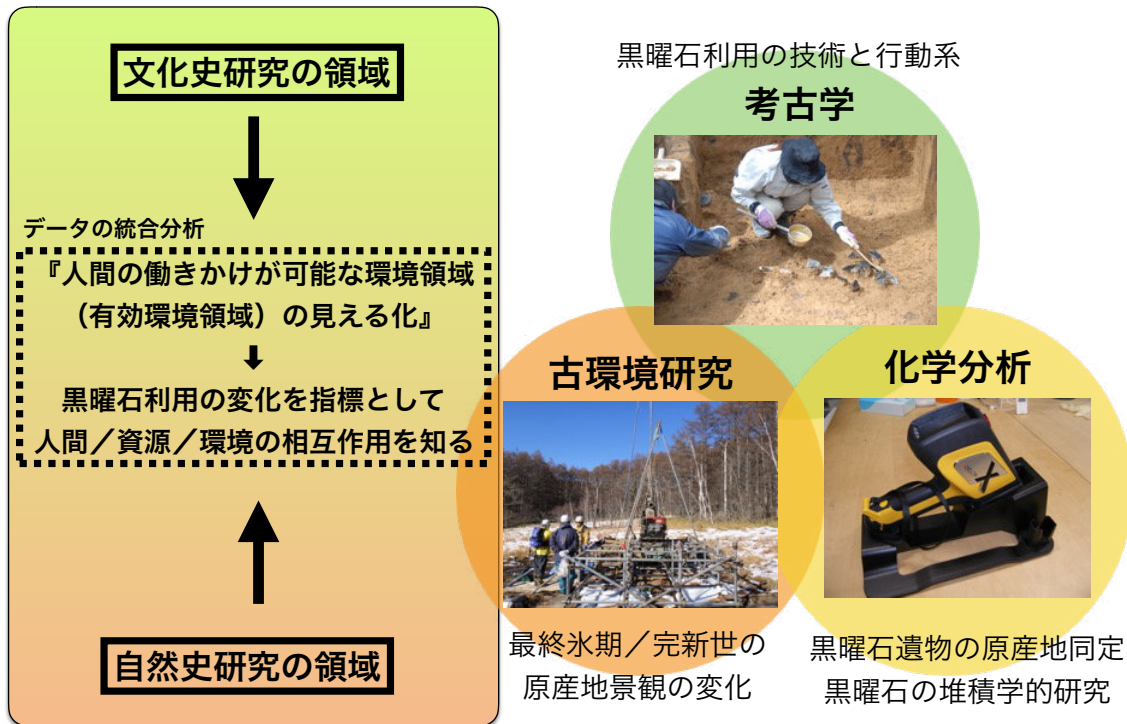
中部・関東地方という広域で石器石材に利用されましたが、地域や時期ごとの高精細な原産地利用頻度を知りたい。黒曜石の広域利用のダイナミクスを詳しく復元したい。この三つの目的はお互いに関係しており、先史人類と古環境の相互作用を黒曜石という資源開発を媒介としながら解明することを近い将来の到達目標としています。

共同研究は、科研費基盤研究(B)「最終氷期における中部高地の景観変遷と黒曜石資源開発をめぐる人間-環境相互作用」19H01345研究代表者：島田和高(2019～2022年度)として実施しています。2019年度の進捗は以下のとおりです。後期旧石器時代の前半期はMIS3に相当しますが、広原湿原堆積



携帯型蛍光X線分析装置 (Burker Tracer 5i)

黒曜石と原産地の学際的な研究体制



物ではその古さまで到達できませんでした。そこで目的(1)では、少なくとも最終氷期にさかのぼる可能性が高い長野県野辺山の矢出川湿原(標高約1360m)の堆積物に白羽の矢を立て、地元の南牧村教育委員会のご協力のもと、2019年10月12日～23日にかけてロシアンサンプラーと機械ボーリングによる湿地堆積物のボーリングを行いました。現在、コアの記載と放射性炭素年代測定(AMS)を進めており、うまく3万年前を超える堆積物にあたっているか結果が待たれます。次に、目的(2)を達成するために携帯型XRF分析装置(p-XRF)を導入し、学史的な後期旧石器時代遺跡を含む多数の中部高地石器群を原産地分析することで、原産地のなかでの原石獲得領域を数多く復元して、この時系列変化の解明を目指します。今年度は、Burker製Tracer 5iに搭載の黒曜石分析用検量線の定量値の評価や、独自の検量線作成を試行しました。また、原産地の黒曜石は、河川などで露頭から二次的に動くことで表面が擦れて変化し

ます。どこにどういう原石が堆積しているか調査し、遺跡出土石器の自然面や原産地分析結果と比較することで、細かな原石獲得場所の推定もできます。最後に、目的(3)のための基礎作業として、2011年と2013年に日本考古学協会で開催された中部・関東地方の遺跡で得られた原産地分析データを最新版に更新します。これによって、より細かな地域や時間幅での原産地利用頻度の変化が捉えられると期待できます。

このほかに、5月24日から6月1日の日程で、International Obsidian Conference (IOC: 国際黒曜石会議) 2019 Hungaryに島田ほか日本人研究者3名が参加し、研究交流とカルパチア山脈黒曜石原産地の巡検が行われました。

共同研究「最終氷期における中部高地の景観変遷と黒曜石資源開発をめぐる人間-環境相互作用」の今後の進展にご期待ください。

公開特別講義 伝統的工芸品の経営とマーケティング Vol.14

進化する信楽焼の伝統 — 陶器の流通・販売についての多様な可能性 —

商品部門が商学部の先生方と共同で実施している陶磁器産地の調査・研究は、2019年度から新たに信楽焼(滋賀県)をフィールドとしました。11月29日(金)にはその成果報告の第一弾として恒例の公開特別講義を開催し、学生・一般合わせて254名の参加者を得ました。

信楽焼はNHK連続テレビ小説「スカーレット」が放映され話題になっていますが、初回の講義は、信楽焼振興協議会の長谷川善文氏をお招きしました。まず、これまで信楽焼がどのような商品を開発してきたか、中世の祭祀具としての大壺、桃山時代の茶壺、茶道具、江戸時代の徳利や播鉢すりばちなど厨房雑器、近代に入って、製糸に使用する糸取皿、火鉢、汽車土瓶から大阪万博の太陽の塔などの芸術作品といった多彩なものづくりの変遷について基調報告をいただきました。

続くディスカッションではPR戦略や商品開発などの現状が話題となりました。大阪・京都・兵庫南部からの自家用車による日帰り入込み客が多いことや京都観光の外国人の立ち寄りという訪問者の

動向。火鉢から植木鉢、ガーデンインテリアへというように需要の変化への柔軟な適応をしてきた商品開発。近年盛んになりつつあるテーブルウェア製造は工業デザイナーとのコラボレーションなども試みられていること。産地卸売商の業態が直売や陶芸体験、飲食店経営など多角的なものになってきていることなど、興味深い動向が紹介されました。



公開特別講義

※この講義の抄録は『明治大学博物館研究報告』第25号(2020年3月31日刊行予定)に収録されます。

図書館ギャラリーでの展示開催

中央図書館ギャラリー

明大博物館コレクションPART2 — 商品陳列館再興と伝統的工芸品収集 —

会期
2019年
11月23日(土)~
12月23日(月)

1980年代に商学部教員が工芸品の産地におもむき、盛んに調査・収集活動を実施しています。そこには、地域の生活習俗との関わりが色濃く残る様子とともに、農間余業・問屋制家内工業といった前近代的な経営形態や農林水産業の衰退、機械化・量産化、石油化学製品の普及、コンピュータ技術の導入など時代の変化の波に翻弄される状況がありました。しかし、高度経済成長が終わり、先行不透明と形容される1980年代において、本来の人間らしい生活の中で、人々がどのように商品形態を作りあげてきたか、その生活文化の形成のあり方を「現代文明の原動力」として見直すべきという問題提起がなされていました。



中央図書館展示

生田図書館Gallery ZERO

プロセスとしての民藝

— 旧明治大学商品陳列館収集資料から —

会期
2020年
1月10日(金)~
1月20日(月)

理工学部総合文化教室の鞍田 崇准教授とのコラボレーションにより1950~1960年代に商品陳列館が収集した工芸品の再評価をテーマとする展示をおこないました。「材料の再生」「用途の転換」「収集のプロセス」というキーワードを掲げ、民衆的工芸の特性である限られた資源を利用する工夫、身近にある材料の活用、一度用いた素材の再利用といったプロセス、高度経済成長という時代の大きな変化の中で新たな需要を模索するプロセス、博物館として工芸品を収集するプロセスに注目しました。



生田図書館展示

古代中国の帯鉤



図1 青銅金銀緑松石象嵌帯鉤

「帯鉤」とは、着物の帯を留める金具のことで、現代でいうところのベルトバックルである。現代においても、ベルトのバックルには様々な趣向が凝らされたものがあり、身に着ける人のセンスやステイタスを象徴している。古代中国においてもそれは同じであったようで、煌びやかな細工が施された帯鉤は、権力者の身を飾っていた。今回は、当館が所蔵している青銅金銀緑松石象嵌帯鉤についてご紹介しよう(図1)。

帯鉤の形状には様々なものがあるが、共通した特徴として、先端が鉤状を呈し(鉤首)、鉤面の裏側にボタン状の突起(鈕)があることがあげられる(図2)。この鈕を帯の一端に固定し、もう一端の調整孔に鉤首をひっかけることで帯を締めることができる(図3)。

古代中国の世界に帯鉤が登場するのは新石器時代の良渚文化(紀元前3500年～紀元前2200年頃)とされるが、普及し始めるのは春秋時代中期頃(紀元前7世紀前半～紀元前6世紀前半)と考えられている。戦国時代(紀元前5世紀～紀元前3世紀後半)に入ると、帯鉤は小型で実用的なものと同型で華美に装飾されたもの

のに分かれていく。例えば、有名な秦始皇帝陵の兵馬俑に表現される帯鉤は実用的な小型の帯鉤が多いが、一方で規模の大きな墓から被葬者の副葬品として出土する帯鉤には、大型で豪華に細工されたものが数多く存在する。当館が収蔵する帯鉤は後者のうちのひとつだ。楽器の琵琶を引き延ばしたような形状で、長さは22.3cmを測り、青銅製のため重量感もある。最も目を引くのは全体にちりばめられた金や緑松石(トルコ石)の象嵌による煌びやかな模様である。大きな菱形模様の合間に描かれた巻雲文は戦国時代～前漢時代に流行した文様である。模様を描く金の細い線は、最初に本体の表面に溝を彫っておき、そこに金糸を埋め込んでいく象嵌技術が施されている。また、ちりばめられている金の円文は、金糸を渦巻き状に巻いて埋め込んでいる。この円文の周囲をめぐる黒い部分は、銀象嵌が変色したものと考えられる。さらに緑松石は、象嵌した後に平研ぎされて滑らかな仕上がりになっており、技術の高さがうかがえる。

このように豪華に加飾された帯鉤は、被葬者に直接装着されるか、あるいは棺の中に納められていることが多い。古代中国においては、人は死ぬと魂(精神)と魄(肉体)に分離し、魂は死後の世界においても生き続けると考えられていたが、これらの帯鉤もまた、被葬者が生前と変わらぬ富と権力を享受できるようにという思いが込められているのだろう。

(川嶋陶子)

〈主要参考文献〉

- ・ 橋爪文之2001「帯鉤概説」『江川コレクション 帯鉤と中国古代青銅器』和泉市久保惣記念美術館
- ・ 天理大学附属天理参考館2003「天理ギャラリー第120回展 帯鉤—中国古代金工の美」天理ギャラリー

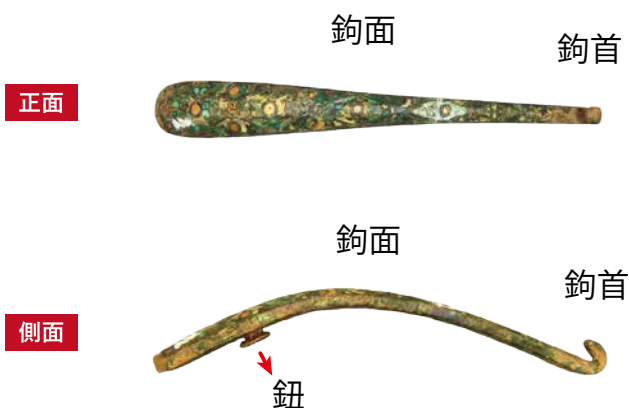


図2 帯鉤の部分名称

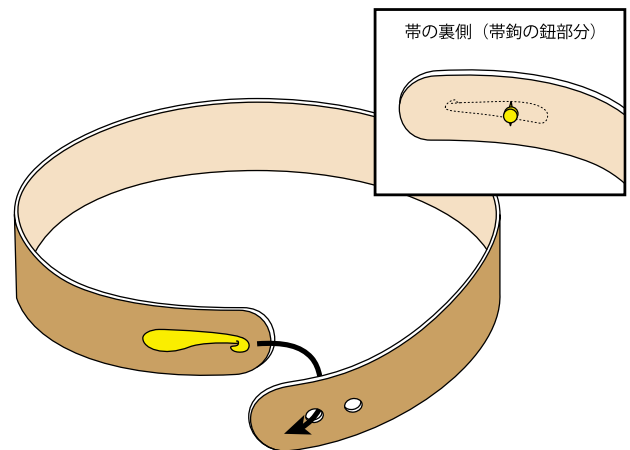


図3 帯鉤の装着方法

シンポジウム「モノと人を結ぶー展示資料とのコミュニケーションー」を開催

2019年11月25日(月)、駿河台キャンパス12号館2103教室において博物館教育をテーマとするシンポジウムを開催しました。昨年度・一昨年度はハンズオン及び参加・体験型プログラムについて取り上げました。今回は、抽象的な思考や仮想現実ではない資料としての“モノ”を保有し、“モノ”がそこにあるという博物館の根本的な性格規定にこだわりました。来館者はモノからどのような情報を得るのか、それによってどのようなインスパイアを受けるのか、モノと関わりを持った結果どのようなことが起こるのか、人とモノとのコミュニケーションのあり方について注目しました。

市橋芳則(北名古屋市歴史民俗資料館 昭和日常博物館館長)「昭和日常博物館の試みーモノに対峙すると人と時と地域が結ばれる。」、高橋 修(東京女子大学現代教養学部准教授)「モノとしての古文書の活用ーその前提と今後についての考察ー」、駒見和夫(明治大学文学部教授)「土器と人を結ぶ知覚アプローチの可能性」の各報告の後、南山大学の黒沢 浩人文学部教授、当館の外山 徹学芸員を交えて討論をおこないました。認知症に対する回想療法やコミュニティづくりで注目された昭和日常生活資料の活用からは実生活の記憶・経験にリンクさせることや未知のモノでもそれを扱ってみる経験が学習効果を高めること、古文書から文

字情報を得るだけでなく実体験として何かを感じ取ること、体を使う作業との組み合わせを工夫する必要、知的特別支援学校への出前講座の成果からは視覚のみではなく触覚が学習者の反応を高めること、他者とのコミュニケーションに基づく資料の多角的な観察が理解力の向上に資するなど、モノを知覚するためのさまざまなアプローチ方法と効果について考える機会となりました。



南山大学との共催シンポジウム

在学生向け特別講義



南山大教員による特別講義

南山大学から黒沢 浩人文学部教授をお迎えして、11月15日(金)の4限、学芸員養成課程の講義「博物館実習」の講義枠を用い、「すべての人の好奇心のための博物館を目指して」の講義をいただきました。新博物館(2013年開館)建設過程においてユニバーサル・ミュージアムを志向するに至った経緯、当面は視覚障がい者による利用を意図した「触る展示」の実現、そのためには点字解説の準備や資料の脇に置くパネルではなく資料へのタグ付けという解説システムのみならず資料触察用のイスや誘導のための床の仕様といった設備面に至るまでのさまざまな配慮・工夫が必要だったことについてお話いただきました。また、近年の博物館学界におけるユニバーサル・ミュージアム論の展開について紹介いただき、受講生にとっては貴重な学習機会となりました。

図書室から

蔵書点検について

博物館図書室では、毎年図書の蔵書点検を実施しています。蔵書点検とは、図書が正しい場所に排架されているか、所在不明となっている図書はないかなど、蔵書の現況を確認する作業です。同時に図書の状態を点検し、ページ外れやラベル剥がれなどの破損があれば適宜修理を行っています。日頃の書架整理に加えてこのような作業を実施することで、快適な利用環境を維持できるよう努めています。

蔵書点検では、図書の表紙に貼付されているバーコード(資料ID)をハンディスキャナで1冊ずつ読み取り、所蔵データと照合します。排架場所が異なっていたり、書架にあるはずの図書がスキャンされていなかったりなど、所在状況の一致しない結果が検出された場合は書架を捜索することになります。受入時に誤った書架へ排架してしまったり、利用後に異なる場所へ戻ってしまったりなど、図書の所在が不明になる原因は様々です。

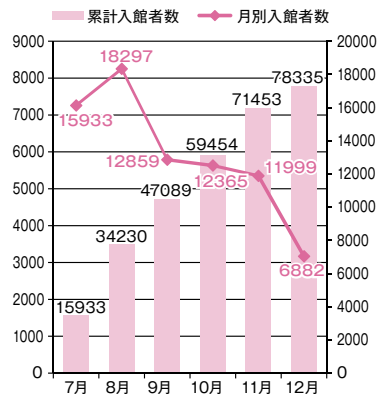
博物館図書室資料の請求記号は、日本十進分類法と独自の排架基準を組み合わせで付与されています。排架順を正しく理解することで利用後適切な場所へ返却でき、蔵書点検時の不明本発生防止につながります。図書の利用の際には、閲覧席や検索用PC(OPAC)付近に設置されている代本板をぜひご活用ください。戻す場所が分からない、探している図書が見当たらないといった場合には、事務室図書担当へお気軽にご相談ください。

博物館入館者数の動き (2019年7月～12月:延べ人数)

2004年4月以降の
総入場者数累計 **1,155,356**人

7月～12月	延べ人数
図書室利用者数	3,233人
教室等利用者数	1,674人

特別展示室来場者内訳		開催日数	来場者数
7/13～9/8	見えているのに見えていない! 立体錯視の最前線	50日間	22,003人
10/4～27	今甦る! 琵琶湖に君臨した王 雪野山古墳展	22日間	4,957人
11/7～12/17	植村直己さんがイノチかけてつかんだコトバ	41日間	6,023人



団体見学の記録 2019年7月～12月

※事前に見学のお申し込みをいただいた団体のみ掲載しております。

【一般】 埼玉県立南校高等学校 PTA(47名) / 世田谷写真クラブ(18名) / 志学館中等部後援会(30名) / 中国社会科学院(17名) / 宇都宮女子高等学校 PTA(45名) / 白幡八幡神社(20名) / 生き生き倶楽部(11名) / 朝日会(10名) / 東京都立昭和高等学校 PTA(53名) / 千葉市小中教職員有志(51名) / 茨城県立境高等学校 PTA(39名) / NPO法人キッズア(7名) / 杉戸町民大学 第三期 ワクワクグループ(15名) / 明大会(6名) / よみうりカルチャー川口 昼飯前にひと旅コース(11名) / 明治大学技術士会(15名) / 栃木県立鹿沼高等学校 PTA(45名) / 大人の平日及休日(15名) / いきがい大学歴史跡クラブ(12名) / お散歩会(6名) / クラブツーリズム「東京の新発見旅へ千代田区編」(119名) / すみだステップハウスおおぞら ひだまり(57名) / 東栄会(13名) / 保護司会裾野支部(35名) / 清瀬郷土研究会(17名) / シルバー葵会(20名) / 千葉県生涯大学 OB会(10名) / 悠遊会(65名) / 千葉県立検見川高等学校 PTA(44名) / 茨城県立明野高等学校 PTA(21名) / さいたま市権擁護委員協議会北部部会(20名) / なないち会(5名) / 八千代市東町会あるこう会(40名) / 五鉄会(6名) / 四季の会(10名) / 松戸創年の会 F班(10名) / 千葉市ことぶき大学 OB会「FKB12」(15名) / 光ヶ丘ウオーキングクラブ(8名) / 北斗モダンボイス(20名) / 読売文化センター OBの会(12名) / 木曜会(7名) / 東京・小金井市 いずみの会(11名) / 有限会社田園ビルメンテナンス(6名) / 東天紅愛好会(45名) / NPO法人 海風47(45名) / 八王子市絹ヶ丘 歩いてみる会(11名) / いきがい大学 32期(13名) / 歩け歩けの会(7名) / 小糸旅行会(18名) / 東十条笑年クラブ(14名) / 校友会史跡クラブ(8名) / 楽歩会(15名) / エイコス200クラブ(12名) / シニアユニバーシティ史跡めぐりクラブ校友会(22名) / ニューカレッジ広場(13名) / いちご会(4名) / NPO法人富士見教育交流センター(23名) / 日本セカンドドライブ協会(8名) / 三朝会(8名)

【小・中学校】 目黒区立第八中学校(6名) / 狭山市立堀兼中学校(12名) / 東京都葛飾区立青戸中学校(6名) / 学童クラブ山手ジュニア(9名) / 青森県むつ市立田名部中学校 3年生(13名) / 山西省大同市中学生社会見学A(27名) / 山西省大同市中学生社会見学B(81名) / 府中市立府中第三中学校(7名) / 会津美里町立本郷中学校(6名) / 国分寺市立第五中学校(6名) / 小金井市立南中学校 1年生(130名) / 大宮開成中学校 3年生(45名) / 江戸川女子中学校(6名) / 明治学院中学校(38名) / 板橋区立桜川中学校(7名) / 青森県立三本木高等学校附属中学校 2年生(87名) / 最上町立最上中学校(6名) / 杉並区立立南中学校(22名) / 桐朋女子中学校(38名) / 大田原市立大田原中学校 1年生(4名) / さいたま市立美園南中学校(6名) / 龍ヶ崎市立中根台中学校(3名) / 大宮中学校 B級グルメの会(7名) / 足立区立東綾瀬中学校 1年生(7名) / 中野区立第四中学校(6名) / 練馬区立大泉西中学校(17名) / 練馬区立貫井中学校(5名) / 秋田県立横手清陵学院中学校(3名) / 高崎市立新町中学校(6名) / 葛飾区立高砂中学校(17名) / 足立区立江北中学校(5名) / 杉並区立済美養護学校 中学部2年(21名) / 香蘭女学校中等科 2年生(10名) / 立教新座中学校(26名)

【高等学校】 川崎市立幸高等学校 2年生(47名) / 東京都立雪谷高等学校(40名) / 東京都立三田高等学校 2年生(8名) / 東京都立昭和高等学校 2年生(33名) / KG高等学院稲田堤キャンパス(15名) / 東京都立日比谷高等学校(10名) / 吉祥女子中学 高等学校(25名) / 千葉県安房西高等学校(31名) / 桜の聖母学院高等学校 新聞部(7名) / 千葉県立津田沼高等学校(24名) / 共立女子第二高等学校 文芸同好会(6名) / 法政大学第二高等学校 1年生(5名) / 豊島岡女子学園 文芸部(11名) / 東京都立豊島高等学校 社会科同好会(14名) / 高崎健康福祉大学高崎高等学校 1年生(79名) / 東京都立津田沼高等学校 1年生(110名) / 東京都立津田沼高等学校 1年生(22名) / 群馬県立太田東高等学校 1年生(42名) / 長野県上田染谷丘高等学校 1年生(41名) / 千葉県立東金高等学校 1年生(40名) / 新潟県立新発田高等学校(11名) / 東京都立本所高等学校(9名) / 茨城県立取手松陽高等学校 1年生(43名) / 鎌倉女子大学高等部 1年生(18名) / 東京電機大学高等学校(118名) / 高崎市立高崎経済大学附属高等学校 1年生(42名) / 茨城県立水戸第二高等学校 第1学年(51名) / 群馬県立高崎東高等学校 1年生(42名) / 長野県野沢北高等学校 1年生(6名) / 茨城県立中央高等学校 1年生(42名) / 東京都立新潟高等学校 2年生(79名) / 星槎国際高等学校 柏キャンパス(6名) / 群馬県立渋川高等学校 1年生(36名) / 川口市立高等学校 1年生(41名) / 中京学院大学附属中京高等学校 2年生(25名) / 錦城学園高等学校(29名) / 茨城県立水海道第一高等学校 1年生(42名) / 新潟県立佐渡高等学校 2年生(120名) / 千葉県立国府台高等学校 1年生(8名) / 千葉県立安房高等学校 1年生(20名) / 水戸女子高等学校(15名) / 東京都立八丈高等学校(8名) / 埼玉県立越谷南高等学校(4名) / 茨城県立石神高等学校 2年生(17名) / 鳥取城北高等学校 2年生(40名) / 群馬県立桐生高等学校 1年生(42名) / 千葉県英和高等学校 2年生(16名) / 埼玉県立桶川高等学校 1年生(41名) / 茨城県立石岡第一高等学校 1年生(80名) / 富山県立桜井高等学校 2年生(12名) / 埼玉県立浦和東高等学校 1年生(7名) / 池田学園池田高等学校(6名) / 群馬県立大間々高等学校(3名) / 関西高等学校普通科 2年(59名) / 鹿児島県立武岡台高等学校(6名) / 茨城県立多賀高等学校(42名) / 東京都立武蔵丘高等学校 1年生(46名) / 東京純心女子高等学校 2年生(21名) / 群馬県立高崎商業高等学校(15名) / 山口県立宇部中央高等学校(8名) / 桐生市立商業高等学校 1年生(41名) / 埼玉県立久喜高等学校 1年生(19名)

【大学・大学院・専門学校】 明治大学法学部 Law in Japan Program サンパウロ大学(9名) / 中央法律専門学校(28名) / 下関市立大学 柳純ゼミ(12名) / 早稲田 EDU 日本語学校(30名) / 早稲田大学法学部 水島ゼミ(10名) / 日本大学経済学部 川出真清ゼミナール(25名) / 白鷗大学 茂木ゼミナール(9名) / 法政大学日本近世史ゼミ(30名) / 明治大学法学部 Law in Japan Program 吉林大学(22名) / 東京経済大学 現代法学部(15名) / 日本ウェルネス保育専門学校(8名)

M2カタログ 刑事ボールペンと古墳Tシャツがリニューアル



刑事ボールペン：
300円

江戸時代の捕者道具をモチーフにしたデザインの3色ボールペンです。「十手」「御用提灯」と捕者三道具「突棒」「刺又」「袖搦」をイメージしました。



古墳Tシャツ：
1,100円

古墳Tシャツにニューカラーのショカラが登場。デザインを一新し、茨城県玉里舟塚古墳の墳丘側面イメージと埴輪群を並べました。サイズはS・M・L・XLをご用意しています。

ミュージアムショップ開室時間

月～金 10:00～16:30 土 10:00～12:45

※日曜日・祝日・大学が定める休日・8月1日～9月19日の土曜日は閉室

※販売品・価格・開室時間は変更する場合があります。

2020年度前期の行事予定と 入会へのお誘い

当会の6月までの行事予定は次の通りです。詳細は下記のHPにてご確認ください。※変更の場合あり

- 4月9日(木) 工芸分野 講演と美演の会 「江戸からくり人形の世界」
講師:榎本誠治氏(江戸からくり工房主宰)
- 5月16日(土) 定期総会・特別講演会 「古墳文化における中央と周縁」(仮)
講師:田中裕氏(茨城大学教授)
- 5月30日(土) 会員企画地元見学会「文の京を歩く!江戸時代の文京区は?」
- 6月19日(金) 第18回古代史講演会「縄文文化の1-1西と東」(仮)
講師:瀬口眞司氏(滋賀県文化財保護協会)

7月以降も多様なニーズに応える行事を計画・実施していきます。

講演会について会員は年間を通じて参加費無料の特典がありますので、新年度の4月よりの入会をご検討ください。
年会費3000円(家族・学生1500円)を下記郵便口座にお振り込みいただければ、どなたでも入会が可能です。(入会金なし)
学習(分科会)活動、博物館展示解説や図書室ボランティアにも多くの会員が参加している当会に、ぜひご入会ください。

明治大学博物館友の会 連絡先

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1 明治大学博物館気付 博物館友の会
mail: meihakutomonokaig@gmail.com

明治大学博物館友の会

検索

※会費払込口座番号(ゆうちょ銀行): 00130-5-368831 明治大学博物館友の会

*博物館に「友の会」担当者は常駐しておりません。電話での問い合わせにはお答えできません。
連絡はEメールまたはハガキにてお願いします。

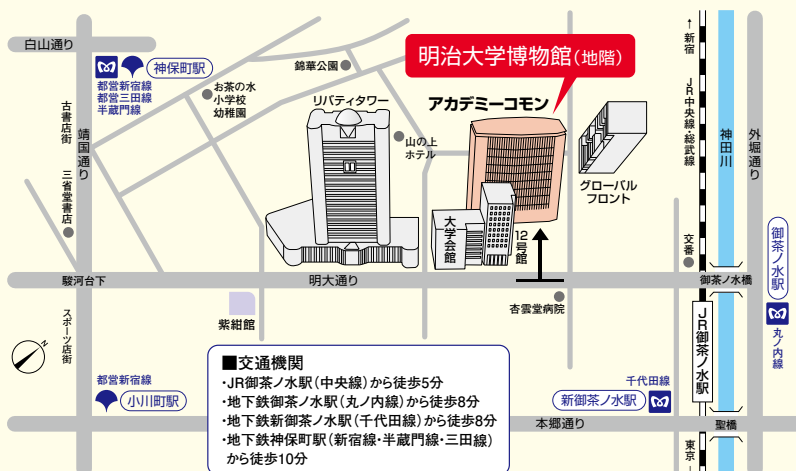
博物館案内

展示室ご利用案内

- ◆開室時間
10:00~17:00(入館16:30まで)
- ◆休館日
夏季休業日(8/10~8/16)
冬季休業日(12/26~1/7)
8月の土・日に臨時休館があります。
- ◆観覧料
常設展無料。
特別展は有料の場合があります。

図書室ご利用案内

- ◆開室時間
月~土 10:00~16:30
- ◆閉室日
日曜・祝日・大学が定める休日
夏休期間(8/1~9/19)中の土曜日
- ※図書室はどなたでもご利用いただけます。
※蔵書は閲覧・コピーのみとなりますので
ご了承ください。



編集 後記

2019年は、広い範囲で大規模な災害に見舞われ、各地の美術館・博物館の貴重な資料が被災したというニュースが報じられていました。被災された皆様には心よりお見舞い申し上げます。特集に取り上げられた当館の資料も多くのの方々にご活用いただいております。今後もかけがえのない資料の保存・活用により一層努めてゆく所存です。